「する」と「やる」
—生理・病理現象の表現を中心にして—

大塚望

1　はじめに

「する」と「やる」は、どちらも漠然とした「何らかの行為」を表す動詞であるが、両者はその意味と用法において共通する部分と共通しない部分とをもっている。本稿は、その異同を明らかにすることを目的とする。ただし、両者の使用範囲は非常に広い[1]ので、全範囲を一度に扱うことは結局、研究を大雑把なものにしてしまい、両者の使い分けを十分に説明するものとはならない[2]。したがって、両者の意味と用法を明らかにするうえでは、むしろ分割して考察する方が有益であろう。

本稿では、特に生理・病理現象の表現における「する」と「やる」を取り上げることにしたい。その理由は、第一にこの表現において両者間に交替現象が見られること、第二に他の名詞群の場合よりも両者の使い分けがはっきりしていること、第三に両者はこの表現において特異な振る舞いをすることにある。

ところで、本研究に関する先行研究は数少ない。とりわけ、意味と用法に関する研究となると、ほとんど見られないのが現状である[3]。その中にあって、森田良行 (1980) は注目される。これは、「する」が生理・病理現象の表現に使われることをはじめて指摘し、その説明を試みたもので、生理現象の表現につい

---

[1]例えば名詞をヲ格にとって現れる場合だけでも何百語という名詞の交替が考えられる (大塚望 (1997) 参照)。また名詞の特徴や性質も様々であり、どう分類するかということだけでも大きな問題である。

[2]先行研究の成果である「動作性」「意志性」「具体性」だけでは様々な用法をもつ両者の使い分けの全てを説明できない。例えば「散歩」「洗濯」はどちらも先の特性をもつが用法の上では「＊散歩をやる」「洗濯をやる」になる。逆に「はしか」は先の特性が弱いにもかかわらず、「はしかをやる」をつくるのである。

[3]先行研究には構文論的視点からの研究、「動作性」「意志性」「具体性」などの観点からの研究などがいくつかあるが、意味と用法の詳細な記述となると森田良行 (1980) 以外には見られない。

て次のように述べている。

> 「AハCヲする」「Cヲする」のCには“生理的な現象”が入る。「息、あくび、くしゃみ、咳、しゃっくり、げっぷ、おなら、まばたき…をする」いずれも動作性の生理活動。平常は起こらない特異な現象「痙攣、めまい、悪寒、寒け」などは「…がする」の自動詞文型となる。

また、病理現象の表現については次のように説明する。

> 当人にとって、一つの肉体的経験や病歴となるような“傷病”関係の語、「怪我、骨折、火傷、結膜炎、下痢、便秘、はしか、疫痢、盲腸、結核、マラリア、病気、流産、妊娠…」などがCに立つと、「君は骨折をした経験があるかい。」「大火傷をしたことがある」など、「AハCヲする／した」文型となる。
> 人間行為なので「やる」を使うこともできる。

森田の説は、両語の別をそれなりに明らかにしている点において魅力的であるが、いくつかの問題点がある。

ア. 生理活動に動作性と状態性の別が考えられるのかということ。

イ. 「怪我…」の全てが「AハCヲする／した」文型をつくるとは考えられないこと、(「＊はしかをする」「＊結核をする」「＊マラリアをする」)。

ウ. 「怪我、下痢、便秘」までが「肉体的経験や病歴」であるとは考えにくいこと。

エ. 生理・病理現象の表現での「やる」の使用を指摘しながら、どのような場合に使われ、それが「する」とどのような関係にあるかについては説明がないこと。

オ. 問題の発端となっている「する」は、二つの文型しかつくらないのかということ。

これらの疑問は、次の3つにまとめられる。

1. 「する」と「やる」のとる格と文型はどのようなものか。

2. 「Cヲする／やる」のヲ格名詞（C）について、
　ヲ格名詞（C）になるのは何か、
　ヲ格名詞（C）の意味的特徴は何か。
3. 「Cヲする／やる」の動詞の機能と意味は何か。

本稿では特に2、3を中心に考察することにしたい。2からは両者の生理・病理現象における分布の違いが、また3からは先行研究では触れられることのなかった、両者がどのような機能と意味をもつかがヲ格名詞との関係によって明らかにされるはずである。

2　「する」と「やる」の格と文型

本節では、「する」と「やる」のとる格と文型をまとめ直して、両者の使い分けがされている領域はどこなのか、問題点を改めて確認しておきたい。具体例を整理してみると、次の5つの文型を引き出すことができる。なお、ABCDEはそれぞれ異なる名詞である。また、場所（デ）、日時（ニ）、原因（デ、カラ）の格は自由に現れるので省くことにする。

(1) 猫がくしゃみをする。生徒が欠伸をした。赤ちゃんがげっぷをする。嫁が流産をした[4]。父が捻挫をする。母が便秘をした。
　→「Aガ[5]Cヲする／した」文型

(2) 子供が腕にけがをする。私が背中に火傷をした。
　→「AガB二Cヲする／した」文型

(3) 犬が畑にうんこをする。太郎が布団におもらしをした。
　→「AガD二Cヲする／した」文型

(4) 寒気がする。めまいがした。頭痛がする。吐き気がした。
　→「Eガする／した」文型

(5) 子供がはしかをやる。息子がおたふく風邪をやった。祖父が腰をやった。選手が肩をやった。
　→「AガCヲやる／やった」文型

[4]「嫁が赤ちゃんを流産をした」や「父が足首を捻挫をする」は、むしろ「嫁が赤ちゃんを流産した」「父が足首を捻挫する」のサ変動詞の方が自然なので二重ヲ格の文型は立てなかった。サ変動詞と「ヲする」との関係についてはここでは立ち入らず、あくまで「やる」との比較に焦点を置くことにする。

[5]森田 (1980) ではハ格であったが、ハ格は主格以外の働きもあるのでガ格を用いた。

以上のように、「する」はガ格、ヲ格、ニ格をとり、3つの他動詞文型と1つの自動詞文型をつくる。一方「やる」はガ格とヲ格をとり、他動詞文型を1つだけつくる。つまり、「する」の方が生理・病理現象の表現では広く使われ、「する」は自動詞・他動詞両方に使われるが、「やる」は他動詞にしか使われないということが分かる。これは、生理・病理現象の表現における両者の大きな違いである。

また、それぞれの格に立つ名詞について見てみると、Aは生理・病理現象の動作者または体験者であり、Cは生理・病理現象(「する」と「やる」のCが同じであるとは言えないが)である。また、BはAの一部分で病理現象(傷)が直接起こる個所、Dは生理活動が及ぶところである。そして、EはC以外の生理・病理現象で、かつ感覚的な生理・病理現象である。

さて、「する」と「やる」の使い分けで問題となるのは、どちらも「AガCヲ動詞」文をつくるという点である。ガ格の名詞(A)は、生理・病理現象の動作者または経験者であればその選択は自由であるから、両者の使い分けには関与しないはずである。しかし、「する」と「やる」のヲ格に立つ名詞(C)はそれぞれ異なることが予想され、この選択が両者の違いや使い分けの要因になっていると考えられる。つまり、「する」と「やる」の比較研究の焦点の一つはヲ格名詞にもとめられるのである。そこで、本稿では「Cヲ動詞(する/やる)[6]」という形式を考察の対象とする。

3 「する」と「やる」のヲ格名詞(C)

ここでは、ヲ格に立つ名詞は何かを明らかにし、その特徴をまとめる。なお「Cヲ動詞」に焦点を当てるので、「AガB二Cヲ動詞」と「AガD二Cヲ動詞」も一緒に考えることにする。

3.1 ヲ格名詞の使用実態

「Cヲする/やる」をつくったときに不自然な表現になるものを×、自然な表現になるものを○、どちらとも言えずあいまいなものを△とすると、Cと「する/やる」との関係は表1[7]のようになる。

[6]ていねい形式が付いたものは考察外とする。また、テンス・ヴォイス・アスペクトの違いについても取り上げない。しかし、形態変化による両者の違いも結局はヲ格名詞の意味内容によるものと考えている。

[7]アンケートの調査結果(大塚(1997))を参考にした。

表 1:

	する	やる		する	やる
息	○	×	胃潰瘍	×	△
あくび	○	×	はしか	×	○
げっぷ	○	×	おたふく風邪	×	○
くしゃみ	○	×	水疱瘡	×	○
しゃっくり	○	×	結核	×	○
まばたき	○	×	インフルエンザ	×	○
おなら	○	×	コレラ	×	×
おしっこ	○	×	マラリア	×	×
うんこ	○	×	エイズ	×	×
妊娠	○	×	白血病	×	×
流産	○	×	心臓病	×	×
下痢	○	×	癌	×	×
便秘	○	×	胃	×	○
けが	○	×	腰	×	○
打撲	○	×	脚	×	○
火傷	○	×	目	×	○
骨折	○	×	肩	×	○
捻挫	○	×	肺	×	△
病気	○	×	おなか	×	×
大病	○	○	咽喉	×	×
盲腸	×	△	頭	×	×

表 1 から、生理・病理現象の表現「A ガ C ヲする／やる」において、両者の現れる領域は「大病」を除けば重複なく二分されていることが分かる。このような結果こそ、「する」と「やる」の、C についての最大の相違であると考えられる。

3.2　「する」のヲ格名詞 (C) の意味的特徴

「する」のとるヲ格名詞は、生理現象を表す名詞群と外傷を表す名詞群とからなる[8]。

生理現象を表す名詞群には「息…」「妊娠、流産」「下痢、便秘」などがある。「妊娠、流産」は病原菌によって引き起こされるのではなく、生得的にその現象の可能性をもつことから、広い意味で生理現象と言ってよいであろう。また「下痢、便秘」は、症状のひどいものは病原菌によって引き起こされた病気とも言えるが、その場合には単に下痢というよりも何らかの病名がつけられる可能性がある。すなわち、これらは日常的に生じる生理現象と捉える方が妥当であろ

[8] 「する」のヲ格名詞には具体的な病理現象の総称である「病気」、そして「大病」もあるが、病理現象ではこれら以外にはない。

う。

外傷を表す名詞群には「けが…」がある。生理・病理現象に比べると外傷は外からの作用によって引き起こされるものであり、この点において特異である。また、外傷を表す名詞の全てが「する」のヲ格に立つわけではなく、ここに属するものの多くは形態的にサ変動詞語幹に相当する名詞であるという特徴がある。

これら二つの名詞群に共通する特徴とは、日常的にかつ頻繁に起こりうる現象であること、繰り返し生じる現象であることの二つがあげられる。これを「日常性」「頻発性」と呼ぶことにしたい。

3.3 「やる」のヲ格名詞 (C) の意味的特徴

「やる」のとるヲ格名詞には、「盲腸…」の病理現象を表す名詞群と、身体部位を指す名詞群とがある。

病理現象を表す名詞群は、その特徴から二つに分けられる。一つは「はしか、水疱瘡、結核…」の名詞群であり、もう一つは「盲腸、胃潰瘍…」の名詞群である。前者は病原菌によって引き起こされる、伝染性のある病理現象である。しかし一般的には、死亡するような不治の病ではなく、多くは幼児期に誰もがかかるような病気である。後者は、病原菌によって引き起こされるような病理現象ではないが、前者同様、治癒の見込みのない重病に値する病理現象でもない。入院もしくは手術を要する程度の病気であると言えよう。これらに共通する特徴は、治癒すると認識されているような病気であること、何度も繰り返し起こるのではなく病歴になるような病理現象であることの二つである。これを「する」のヲ格名詞と比較すると、その特徴は「非日常性」「一回性」ということにあると考えられる。

身体部位を指す名詞は、先行研究でヲ格に立つとして取り上げられたことはないが、やはり病理現象の表現をつくるものとして捉えるべきであろう。これには、身体の内側と外側を指すものがあるが、「やる」のヲ格名詞になるものの多くは外側の体の部分である。内側では「胃」以外はないようである。慣用的な用法であるという理由によるのかもしれない。

3.4 「する」「やる」のとらないヲ格名詞

先行研究では「コレラ、マラリア、癌…」の病理現象の名詞群は、「する」もしくは「やる」のヲ格に立つとされた。しかし、表 1 から、これらがヲ格に立つ

ことはかなり難しいと言わざるをえない。これらに共通する特徴としては、病理現象を表す名詞であること、治癒の見込みの非常に低い病気であり、一般的に死に至ると認識されているような病気であること、の二つをあげることができる。この他にも、先行研究では取り上げられていないが、「風邪、鼻水、涙、嘔吐、虫歯、喘息…」が考えられる。ただし、これらは個別的であり、これらに共通する特徴は見出しにくい。とはいえ、これらは病理現象の表現でよく使われる「かかる」「なる」といった動詞をとる、もしくはガ格に立つ名詞であるということくらいは、言えそうである。

3.5　ヲ格名詞 (C) のまとめ

先行研究では「する」と「やる」は交替可能であるとされている。しかし、表 1 から「する」と「やる」の現れる領域が分かれているということ、そして両者はともに行為を表す動詞でありながら、生理・病理現象の表現をつくるときには、概ね交替不可能であることが分かった。「する」は病理現象・身体部位の名詞をヲ格にとることはなく、逆に「やる」は生理現象・外傷の名詞をヲ格にとることはない。また、ヲ格名詞の意味的な特徴は前者が「日常性」「頻発性」、後者が「(病の) 治癒性」「病歴」というものであった。以上の結果をまとめたものが表 2 である。ただし、表 2 は必ずしもヲ格名詞が「する」「やる」との共起を一方的に決定するということを示すものではない。両者の関係やその共起の可否については、さらに以下で述べる。

表 2: 生理・病理現象の表現

意味的特徴	生理・病理現象の名詞群		する	やる
日常性 頻発性	生理現象	おしっこ　おなら　げっぷ あくび　しゃっくり　流産 妊娠　下痢　便秘…	○	×
	外傷	けが　火傷　捻挫　打撲　骨折　…	○	×
病の治癒性	病理現象	病気	○	×
		大病	○	○
病歴	伝染性	盲腸　胃潰瘍…	×	△
		おたふく風邪　はしか　結核…	×	○
致死	重病	マラリア　コレラ　ペスト 百日咳　エイズ…	×	×
		心臓病　白血病　血友病　癌…	×	×
	身体部位	目　腰　肩　胃…	×	○

○は「C ヲ動詞」をつくるもの、×はつくらないもの、△は判定の揺れるものである。

4 「する」と「やる」の機能と意味

本節ではヲ格名詞（C）と「する／やる」との関わりから、両動詞の機能（機能動詞[9]と呼ばれるときの「機能」）と意味について見ていく。

4.1 「する」の機能と意味

4.1.1 「する」の機能

「する」は形式動詞であるが、生理現象の表現における「名詞ヲする」の表す漠然とした動作の意味を限定し、実質的な意味内容を示しているのはどこかと言えば、それはヲ格名詞ということになる。このように「する」は、名詞と結合することにより実質的な意味が名詞に示され、動詞自体はおおよそ文法的な機能を果たすというような動詞、つまり機能動詞である。例えば、「あくびをする」では実質的な意味はヲ格名詞の「あくび」によって示され、「する」は文法的な機能ばかりを担っていると考えられる。しかし、「けがをする」「火傷をする」の場合はどうか。これらは「する」に（負う）という実質的な意味が感じられるので実質動詞と考えることもできるが、実質動詞「負う」とは異なり、この動作を受ける対象が全てヲ格に立つわけではない（実質動詞「負う」の「重荷を負う」「責任を負う」に対して「＊重荷をする」「＊責任をする」）。(負う) は、あくまで「けがをする」において生じる意味なのである。それでも他の機能動詞に比べれば、いくらか実質的な意味があると考え、これを実質動詞寄りの機能動詞と捉えることにする。つまり、「する」には機能動詞と実質動詞寄りの機能動詞としての働きがあると考える、ということである。

4.1.2 「する」の意味

動詞の機能的特徴から「する」は、ヲ格名詞を切り離してはその意味を記述できない。そこで、「Cヲする」全体を視野に入れて「する」の意味を考えることにする。ただし、実質的な意味の中心はヲ格名詞にあるので、あえて「Cヲする」の意味を記述するとなると、いささか不自然な表現にならざるをえないが、解釈されるおおよその意味として表すことにする。「する」の表す意味は大別して二つある。一つは生理現象の名詞群「あくび、げっぷ、おなら…」「妊娠、流産」「下痢便秘」が「Cヲする」の形式をとるときで、生理現象（C）に伴う生理活動を行うという意味を表す。言い換えれば、その生理現象（C）が生じ

[9] 機能動詞は岩崎英二郎 (1974) で取り上げられ、村木新次郎 (1980) で詳細かつ体系的に研究されている。本稿では実質的な意味の有無をもって、実質動詞、機能動詞の別を立て分けることにする。

ること引き起こされること、そしてその状態（C）になることであると解釈される。もう一つは、外傷を表す名詞群「骨折、捻挫打撲…」が「Cヲする」の形式をとるとき、そのような現象（C）が生じてそのような状態（C）になることを表し、「けが、火傷」では「する」は (負う) という意味を表している。

4.2　「やる」の意味と機能

「やる」は機能を考える上では先に意味を明らかにする必要があるので、意味を先にまとめる。

4.2.1　「やる」の意味

病理現象の表現における「やる」も「する」同様、「Cヲやる」全体から動詞の意味を考えることにする[10]。

「やる」の表す意味は二つある。一つは、治癒する伝染性の病理現象や入院・手術を要する程度の治癒する病理現象がCに立ち、「Cヲやる」の形式をとるときである。それは、そのような現象（C）が生じ、そのような状態（C）になり、治療を受けたりして治るという一連の過程を含んだ、病歴と言えるような (経験) という意味を表している。例えば、「子供がはしかをやる」では、単に子供がはしかにかかることだけではなく、はしかという病気の状態になり治療などをして治るという動作までを表すと解釈される。これは、「＊病気をやる」に対し「大病をやる」が許容されることの説明にもなる。つまり、「大病」が病歴として（経験）と言うに足るものであるということが、「やる」との共起を許している要因であると考えられるのである。また、同じ伝染病でも「マラリア、ペスト、エイズ…」は治る病気であるという認識が低い。同様に入院・手術を必要とするような「心臓病、白血病、癌…」も治癒の可能性は低く、治る病気であるという認識をされていないのが一般的である。「やる」が病理現象の発症から完治までを表すとすれば、完治するという認識のない、このような重病には「やる」は結合しにくいということになる（「＊エイズをやる」「＊癌をやる」）。しかし、病気を克服したという経験があるならば「やる」の表す（経験）という意味とぶつかることはなく、例えば『私は若いころマラリアをやった』と言うこともできよう。

もう一つは、身体部位を指す名詞がCに立ち「Cヲやる」の形式をとるときである。例えば「父がストレスで胃をやる」の場合、父がストレスのために胃

10「やる」は過去形「やった」の形式で使われることが多い。その理由は、ヲ格名詞の意味内容が非過去形の表す基本的なテンス的意味 (未来) と相容れないためだと考えられる。

を痛める、悪くする、病むということを表すと解釈されよう。これが、「やる」の表すもう一つの意味であり、身体部位を（痛める、悪くする、病む）という意味を表している。

4.2.2 「やる」の機能

先行研究で「やる」を形式動詞または機能動詞として位置付けたものはない。その理由は、「やる」には「与える」「移す」という実質動詞としての在り方があるからであろう。しかし、病理現象の表現における「やる」を見てみれば、単独で「動作・行為・作用」を表す動詞であり、実質的な意味はやはり希薄かつ漠然としている。そして、その希薄な意味を補足し、漠然とした意味を限定するのはヲ格名詞であると言えよう。この点から、少なくとも病理現象の「やる」は「する」同様、機能動詞の側面をもっているということになる。では、どの程度、機能動詞的なのだろうか。

先述したように「はしかをやる」は、はしかの発症から治癒までを一つの過程として含み、(経験) という意味を表している。この (経験) という意味は、ヲ格名詞の表すことがら（はしか）以上の意味であり、「やる」はこの意味を含む点で実質動詞的である。しかし、動詞自体が「経験する」という意味をもつわけではなく、それはあくまでも「Cヲやる」に含まれる意味である。もし「やる」が（経験）という実質的意味をもつ実質動詞だとすれば、ヲ格名詞にはその動作を受ける様々な名詞が立ち得るはずであるが、それは病理現象の名詞に限られている。すなわち、「やる」は、(経験) という実質的意味をいくらか担った、実質動詞寄りの機能動詞であると考えられるのである。

一方「胃をやる」は、胃を（痛める、悪くする、病む）などの意味を表し、実質的な意味は「やる」に担われていると考えられる。全く同じではないが、このような意味が実現されるのはヲ格名詞が身体部位のときだけではない（「敵をやる」「あいつをやる」）。こう考えると、「やる」は実質動詞の機能をもつということになる。

よって、「やる」は機能動詞寄りの実質動詞と、実質動詞としての働きがあると考えられるのである。

4.3 「する」と「やる」の比較－機能と意味－

前項では「する」と「やる」を個別に考察したが、ここでは両者を比較し、その相違をまとめる。

4.3.1　「する」と「やる」の機能的相違

生理・病理現象の表現における「する」は機能動詞と実質動詞寄りの機能動詞という働きをもち、「やる」は実質動詞寄りの機能動詞と実質動詞という働きをもつことが分かった。両者は機能動詞という働きをもちながらも、「する」はより機能動詞的働きを示し、「やる」はより実質動詞的働きを示している。図示すると以下のようになる。

図 1:生理・病理現象の表現

機能動詞　　実質動詞

<--->

「する」　　「やる」

4.3.2　「する」と「やる」の意味的相違

「CヲするJの実質的意味はほぼヲ格名詞（C）が担うため、「する」自体は漠然とした（行為）と（負う）という意味を表す。「CヲやるJの実質的意味はヲ格名詞（C）及び「やる」が担い、（経験）（痛める、悪くする、病む）という意味を表している。これが両者の意味的な違いである。まとめたものが表3である。（　）は実質的意味を表している。

表 3:

生理現象（あくび、げっぷ…） （下痢、便秘） （流産、妊娠）	する
外傷（けが、骨折、火傷…）	する（負う）
病理現象（はしか、おたふく風邪、 胃潰瘍、結核…	やる（経験）
身体部位　目、胃、腰、肩…	やる（痛める）

5　おわりに

本稿は、「する」と「やる」の用法の一つである生理・病理現象の表現を取り上げ、両者の取るヲ格名詞の違いを明らかにし、その意味と機能について考察した。その結果、「する」の方は使用範囲が広く、自動詞・他動詞として使われること、「AガCヲする」文型では生理現象・外傷の表現で使われ、そのヲ格名詞の意味的特徴は「日常性」「頻発性」であることが分かった。一方、「やる」は他動詞としてのみ使われること、「AガCヲやる」文型では病理現象の表現で使

われ、そのヲ格名詞の意味的特徴は「(病の) 治癒性」「病歴」及び身体部位であり、「非日常性」「一回性」であった。そして、「する」は機能動詞、「やる」は実質動詞としての働きをそれぞれ強く示すものであった。

生理・病理現象の表現から「する」と「やる」を考察した結果、以上のことが明らかになった。しかし、これは「する」と「やる」全体の一部である。今後は他の用法での異同や、両者が単独で使われるときの違いなどを明らかにして、最終的な「する」と「やる」両者の全体像を明らかにしたい。

＜参考＞アンケートの調査結果（大塚 (1997)）

◎は「完全に言える」、○は「ほぼ言える」、△は「まあ言える」、□は「少し不自然」、×は「かなり不自然」、＃は「全くいえない」ことを表す。

	する	やる		する	やる
けが	◎	#	コレラ	#	×
捻挫	◎	#	マラリア	#	×
打撲	◎	#	結核	#	×
骨折	◎	#	エイズ	#	#
病気	◎	#	白血病	#	#
大病	◎	◎	胃癌	#	#
下痢	◎	#	胃潰瘍	#	○
便秘	○	#	盲腸	#	△
欠伸	◎	#	肝炎	#	○
息	◎	#	じんましん	#	#

参照文献

岩崎英二郎 (1974)「ドイツ語と日本語の機能動詞」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』**6**

玉鉄橋 (1988)「「する・やる・行う」についての構文的分析」『言語と文化』**3**

大塚望 (1997)「「やる」動詞の意味と用法について」筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科中間論文

影山太郎 (1980)『日英比較　語彙の構造』柏松社

神田靖子 (1982)「「する」と「やる」」『日本語教育事典』大修館書店

佐藤琢三 (1995)「日本語の行為を表す動詞—外国人に対する日本語教育のための基礎的研究として—」『国際関係研究（国際文化編１４）』**16-2**. 日本大学国際関係学部国際関係研究所

田野村忠温 (1988)「「部屋を掃除する」と「部屋の掃除をする」」『日本語学』**7-11**

中本正智 (1986)「やる・する」『日本語研究』8 東京都立大学国語学研究室

針谷明子 (1995)「動詞ヤルについて―スルとの相違―」創価大学卒業論文

日野資純 (1998)「両形並存の視点から見た方言と国語史―スルとヤルー」『東京大学国語研究室創設百周年記念　国語研究論集』汲古書店

平尾得子 (1990)「サ変動詞をめぐって」『待兼山論叢（日本語学篇）』24

村木新次郎 (1980)「日本語の機能動詞表現をめぐって」『国立国語研究所報告』65

――(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

森田良行 (1980)『基礎日本語 1』角川書店（1977 初版）

"Suru" and "Yaru"
–Focusing on Expressions of Physiological and Pathological Phenomena–

Nozomi OOTSUKA

The purpose of this paper is to define the difference of Japanese verbs "suru" from "yaru" which mean action. And it especially focuses on expressions of physiological and pathological phenomena.

The following is the result.

1. Case and Sentence pattern.

"suru" takes cases of 'ga', 'wo' and 'ni', and makes three sentence patterns of transitive verb and one sentence pattern of intransitive verb. "yaru" takes cases of 'ga' and 'wo', and makes only one sentence pattern of transitive verb.

2. Characteristics of nouns that stand on the objective case. (Cf. table1, 2)

Nouns that stand on the objective case of 'suru' are phenomena that usually and often happen and repeat. These characteristics are called 'daily occurrence' and 'frequent occurrence' in this paper. Nouns that stand on the objective case of 'yaru' are pathological phenomena that are understood to recover and that can be a medical history. These characteristics are called 'undaily occurrence' and 'once occurrence' in this paper. And there are nouns that express parts of body.

3. Function and Meaning. (Cf.figure1 and table3)

'suru' shows function of functional verb more strongly than 'yaru'.

'yaru' shows function of substantial verb more strongly than 'suru'.